
答え

K

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

答え

【Nコード】

N3103K

【作者名】

K

【あらすじ】

編集者に作品を酷評された私は、雨が降っているにもかかわらず出版社を飛び出した。行き先など考えてなかった私はいつのまにか、ベンチに座っていた。

（前書き）

あくまで個人の考え方です。
何かのヒントになれば幸いです。

そらは薄い雲に覆われている。先ほどから降り続いている雨はやむ気配すらない。

そんな中私は傘も差さぬままぼつんと、ひとりベンチに座っていた。公園では、私以外に人はいない。それはそうだ雨なのである。

私が着ている背広は、雨のせいで濃いねずみ色になっている。

私はある出版社に勤める、いわゆる作家という職業である。雨が降る前、私は書いた小説を酷評され、思わず出版社を飛び出してきた。そしてベンチに座ってから、ずっと時間の経つのも忘れ、座っていた。いまさら戻るわけにもいかぬ。しかし、私が座ってどのくらいが過ぎたのだろう。不安になってふと横を見た。すると、傘を差している男が一人。まるで最初からそこにいたかの様に、立っていた。タキシードではない。コートだろうか。黒い服だ。だが、黒い服だけではない。

心なしか男が立っているそこだけ、月がない晩のように暗い。

「誰です」

自分でもわかるほど、間の抜けた問いかけである。

男はその問いかけに誰だってよいでしょう、と言った。確かにそれはそうだが。

私は、口を閉じた。

男もそう答えたきり、じっと黙っている。

「いつから」

唐突に声がかきこえたので初めは誰の声だかわからなかった。

それでも私以外には隣に立っている男しかいない訳で、やはりその声は男のものであった。

「いつから言葉は在るのでしょうか」

奇妙な質問だった。今まで考えたこともないが、確かに不思議である。原初の言葉は、どのような形をしていたのだろうか。日本語は世界の中でも相当複雑な言葉だという。そんな日本語が、昔からあった。いや、簡単な言葉が生まれそこから発展して複雑な言葉が生まれる。むしろそういうものではないだろうか。ならば、日本語より簡単かつ、26字ですべてを表す言葉。私は男に、英語ではないでだろうかと言った。

しかし男は残念そうな顔をして言った。

「確かに英語は余分なものが少ない簡素な言葉です。だからと言って歴史が深いか。そういう訳でもありません。一説では英語の原型ができたのは5世紀だと言われています。そう考えると、あまり古いというわけでもない。それに、あなたの考え方は簡素なものから複雑なものができるというものですが、簡単なものが変化し、複雑なものができる場合も多々ありますよ。タペストリーは近くで見れば複雑な作りをしているように見えますが、何のことはない、針を動かすだけの単純な作業の集合です。スポーツや芸術などもそう言っているでしょう。満足にキャッチボールもできなかった少年も、真剣に練習することで野球選手になれる。そういうものではないですか」

言われてみるとそんな気もしてくる。それならば、最初にあるのは簡単な英語ではなく、日本語のような複雑な言葉であったように思われる。でも、その日本語の起源はもともと中国の漢字だと聞いたことがある。ならば日本語よりも最初になければならない。

私は男にそう言った。

「それは文字に限った話でしょう。確かに日本の文字、平仮名や片仮名の形は漢字が起源です。その漢字も文字の形としては紀元前の甲骨文字までさかのぼるでしょう。それだけ聞くと古いように感じますが、それはあくまで記録されている物で比べた限りでは、ということです」

「つまり、その言葉が存在した事実さえ記録されていない、遙か昔

に消え去った文字もあるかもしれないということですよ。イースタ
ー島の文字、ロンゴロンゴ文字なんかがそうでしょうか。あれも、
文字としての形は残っていても言葉として解読できる者はもはや存
在しません。いやたと言葉として解読できる者がいなくても、形
が残っているだけ僥倖でしょう。私たちが知ることもできない、時
の流れが形すら流し去ってしまった言葉もあるのでしょうから」

ならば、いつから言葉はあったのだろう。たと言葉として解読で
きるものがいなくても、文字として形が残っているものなら比べよ
うがある。でも、文字としての形や存在した事実が残っていないも
のは、もはや比べようがないではないか。私がいつも使っている言
葉はいつから在るのだろう。

「答えは簡単です。？まず初めに言葉ありき？。人が誕生する前か
ら言葉は在ったのです。」

「まさか」

「嘘ではありませんよ。太古の昔の神代から言葉は在ったのです。す
でにあつたからこそ人は言葉を覚え、使うことができた。神代から
あつたからこそ言葉は完全なのです」

完全、なのだろうか。

「それは暴論ではないでしょうか。言葉は完全ではありませんよ。
言葉で、？りんご？というものを伝えられても、どのようなりんご
なのかは伝えられません。個人の中で判断されるような、抽象的な
事柄に言葉は弱いのです」

「それは言い方の問題ですね。そのものの特徴は、言葉を費やすこ
とで表すことが出来ます。その？りんご？が、どのような形で、ど
のような色で、どのような重さなのか。それを一つ一つ言葉で表せ
ばよいのです。しかしそれをしないのはなぜか。膨大な時間がかか
るからです。でも、それはあくまで人間の都合であって、言葉の優
位性を否定する根拠になりえない。なのに、使えば何もかも表すこ
とができる言葉を完全ではない、と言うのはそれこそ暴論ではない
でしょうか。性能のよいコンピュータも猿の前ではただの硬い箱。

そういうことなのです」

私は黙り込んだ。確かにそうなのだ。男が言っていることは概ね正しいのだ。確かに言葉で、そのものの形や特徴は言葉で伝えることができるから。でも、それだけのことで言葉を完全と認めてしまってもいいのだろうか。もし、その事実を認めてしまふ様な事になれば、この世界は言葉で表すことができることになる。そう考えていると、

私は見つけた。言葉で表すことができないもの。それは

「心だ」

心、気持ち、感情。どれも自分以外には分からない曖昧かつ動きやすいものなのだ。それはたとえ言葉でも表せない。それは当たり前なこと。でもそんな当たり前のことに、私はいまさら気が付いた。

「ようやく気付きましたね」

男はそう言った。私が男の方へ顔を向けると、男は微笑んでいた。

「言葉は太古の昔から自然とあったものではありません。人の誕生と共に誕生し、人の成長と共に成長し複雑化していったのです」

「なら、最初に言っていたあれは」

「あれは、あなたに気付いてもらうための、詭弁です」

男はそう言った。では果たして、男は私に何を気付かせたかったのだろう。わからない。

でも、私は薄々感づいている。男は静かに、私に語りかけた。

「あなたが書く人物のイメージや心理描写が書けてないから、どうだと言うのです」

「もしあなたが、ちゃんと書けていたとしても作者が思い描いている通りに読み取ってくれるのは、ほんの一部の読者だけでしよう。気持ちには伝わりにくいもの、ですから」

「ましてや、その作品全体に込められている主題や、作者の思いを汲み取れるのは自分以外にいないと言ってもいいでしょう。そんな当然のことを指摘されただけで、あなたは何でそんなに落ち込むのですか。それだけのことで自分が精一杯書いた作品を、あなたは何

で否定するのですか。何故あなたは書くのを止めようとするのですか」

「それは」

「自分の作品が否定されるのが怖いからですか。悲しいからですか。苦しいからですか。出版社の人が本を出してくれないからですか。それとも本が売れなくなるからですか。」

そんな理由のためにあなたは、物語を書くのを止めるのですか」

「そうじゃない」

そうじゃないけど。

そう言えば、

私は何で小説を書いてきたのだろう

「それこそ簡単なことではないですか。言葉の起源を探るよりも、簡単で確実ですよ」

「あなたは」

好きなんでしょう。男の最後の言葉は私の耳に残響しながら、体の隅々までゆつくりと染み込んでいった。そうか、好きなのか。

私は小説を書くことは仕事だからという理由をつけてきた。いつからだろう。仕事だからと言う理由に負けて、楽しさを無くしたのは。出版社の批評が辛かった事もあった。アイデアが出ずに苦しいこともあった。それでも書き続けてきたのは、私自身、小説を書くのが好きだったからではなかったか。そうだ、答えは

「答えは簡単だったんだ」

いつのまにか雨は止んでいた。隣にいた男はもういない。

それを確認して、私はゆつくりと立ち上がりベンチを後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3103k/>

答え

2011年1月13日03時14分発行